

最優秀賞

大学生部門へいきいきした作品

東京大学

浦野 湧

「起きてる?」

うつぶせのまま目が覚めた。

もう太陽は昇りきっているのか、カーテンの隙間からは眩しい光が差し込み、本と洋服で散らかった部屋を薄暗く照らしている。昨晩は何をするでもなく、三時ごろまで起きていた挙句に、風呂にも入らず寝てしまったのだ。

父がこどもの日に亡くなってから、二週間が過ぎた。働き詰めでろくに帰ってくることもなく、週に一度くらいしか話さなかった父。正直、こんなにシヨックを受けるとは思っていなかった。期限の迫った授業の課題も、趣味の読書も手につかないまま、昼と夜を漫然と繰り返した。

手元のスマートフォンを確認すると、大学の友人たちからのメッセージがいくつか届いている。昨日のうちに横浜で遊ぼうと誘われたのだが、どちらともつかぬ返事をしてうやむやにしまっていた。

まもなく集合時間になろうとしていた。彼らはもう諦めかけているだろうか。今から支度を始めても、横浜までは二時間近くかかる。このままもう一眠りして、夕方から課題にとりかかる体力をつけた方が賢明かもしれない。

そのとき、スマートフォンの画面が再び灯った。

「起きてる?」

またしても、彼らの一人からのメッセージだった。大学で会う彼らは、以前と少しも違わぬ口調で、相変わらずの馬鹿話を語ってくれるのだった。そんな彼らといると、私も前と変わらない、晴れやかな気持ちになった。

この先、私がどんなことを考え、どんな生活を送り、どんな人生を過ごすのか見当もつかない。でも今、一つでも純粋に楽しめることがあるのなら、それに従うべきなのかもしれない。清算は、きつと後からできる。

「今起きた。めっちゃ遅れる」

私はそう返事すると、足の踏み場もない部屋をかき分け、浴室のある一階へ向かった。